

氏 名	清 水 勝
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 5192 号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項
学 位 論 文 名	近世の地下の革新和歌の発生展開と終焉について —小沢芦庵・香川景樹を中心に—
論文審査委員	主 査 教 授 村 田 正 博      副 査 教 授 小 林 直 樹 副 査 教 授 塚 田 孝

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 《第一部 歌人小沢玄仲 <sup>(はるなか)</sup> 出自と成長》

小沢芦庵は、「たゞこと歌」という和歌のありようを提唱したこと、歌集『六帖詠草』（版本では約二千首、自筆稿本では約一万六千首）を編纂したことによって知られている。従来、「たゞこと歌」の提唱は、芦庵三十歳代に始まるもので（六十八歳のころとも）、『六帖詠草』もそのころから形成されたとするのがおおかたの見方となっているが、論者発見の新資料『ふる乃中みち』（寛政八[1796]年書写、芦庵七十四歳）などの検討から「たゞこと歌」の提唱を寛政十二年ごろ（第一章 歌人小沢玄仲芦庵出自疑問、第二章 歌人玄仲の成長、第四章「たゞこと歌」と『六帖詠草』）、『六帖詠草』の編纂を寛政六年以降のこととして、通説よりもっと繰り下げて考えるべきではないかという見解を提示する（第三章 専門歌人小沢芦庵）。

### 《第二部 芦庵自撰献上本『六帖詠草』疑問》

自筆本『六帖詠草』一万六千首を二千首に縮小した『六帖詠草』がある。<sup>のぶより</sup>織田信憑（小沢氏が仕えた丹波国柏原藩主）に献上した本である（文化元[1804]年、信憑序、同八年刊）。この献上本は、もとの自筆本が年次を逐う配列であるのに対して、年次に主眼をおかず、別の構想によって編集したものであり（第一章 芦庵自撰本の意図）、俳諧連歌の付合の技法によりつつ、各部立ごとに山場を設けて妙味をかもそうとする演出が認められるとしている（第二章『袖中和歌六帖』と演出）。また、その編纂に先だつ『袖中和歌六帖』（寛政九[1797]年間）をめぐって、『六帖詠草』の編纂・命名の由来となった『古今和歌六帖』との関連にも考察を加えている（第二章）。

### 《第三部 歌論三部作 版本『布留の中道』に至る三部作（写本）の変化》

芦庵の主要な歌論の伝本の検討により、『和歌一枚起請文』が天明五年（1785年、六十三歳）ごろの成立、また『布留の中道』に収められる『ちりひち』が天明六・七年ごろ、『あしかび』が寛政二年（1790年、六十八歳）、『或問』が寛政八年五月以前に成立したものと推定（第一章 版本『布留の中道』まで）。「たゞこと歌」の主張が見える『布留の中道』の下巻『或問』について、寛政八年書写の『ふる乃なか道』には、その『或問』が含まれず、寛政十二年（七十八歳）に『布留の中道』が刊行される、その直前に「たゞこと歌」に関する朱書きの傍注が施されるのがその主張を確認できる初見とする（第二章 井上夏鼎と芦庵歌論）。

### 《第四部 小沢芦庵と香川景樹・芦庵周囲》

芦庵の門下、香川景樹（1768～1843）が芦庵『六帖詠草』（約二千首、文化八[1811]年刊）より百六十三首を抄出した『芦庵翁六帖詠草摘英』の考察を通して、芦庵の継承者としての景樹の一面を浮き彫りにしている（第一章 香川景樹側から見た芦庵、第二章『摘英』編集から『桂園一枝』へ—景樹による芦庵の継承—）。また、芦庵と慈延（ともに平安[京都]歌人四天王の一人）との交流を、歌壇史の面から考察する（第三章 芦庵と

その周囲との交流)。

#### 《第五部 桂園派の発展と凋落》

芦庵の和歌・歌論は、香川景樹(1768～1843)、その門下の八田知紀(1799～1873)に継承され、さらに八田知紀の門下の高崎正風(1836～1912)へと展開する。「堂上」の諸派とは異なる歌風・歌論を打ち立てる過程でそれはあったのだが、とりわけ景樹・知紀・正風は堂上歌人(とりわけ千種有功<sup>ちぐさありこと</sup>[1797～1854])の支持も厚く、明治の宮廷和歌の中心を占め、歌壇における指導的立場を確立するに至る。その様相を、新派和歌(近代短歌)の擡頭までを視野に入れつつ考察する(第一章 桂園派の興隆、第二章 桂園派を支えた堂上歌人、第三章 幕末より明治へ―幕末諸派歌人、明治宮廷派誕生と終焉―)。

### 論文審査の結果の要旨

古来、和歌という文芸のジャンルを主催してきたのは、おもに貴族たちであった。その動向に顕著な変化が現われるのは、近世の、とりわけ後半においてである。この論文は、近世の後半において、「堂上」の和歌に対してなぜ「地下」の新風が興ったのかという問題について、主として小沢芦庵(1723～1801)の和歌と歌論、およびその感化を深く受けた香川景樹(1768～1843)の和歌と歌論の情況を中心として論じようとするものである。

従来の研究では、「堂上」と「地下」との対立の面を強調するあまり、冷泉為村(1712～74)らによって代表される当時の「堂上」和歌の伝統を芦庵・景樹が打破したものと論じられてきた。しかし、この論文では、芦庵・景樹らの新風は、「堂上」の諸派とも交流を保ちながら、「堂上」がその伝統継承のゆえになしえなかった和歌の革新を果たし、明治時代の宮廷における中心的存在ともなったと捉えるのが、より実情に即すること(発生・展開)、そうして、この新風の和歌は、明治中期の新派和歌(近代短歌)の出現により和歌史上の役割を終えたものと捉えている(終焉)。

和歌研究の主流が、古代・中世の貴族の文芸としてのそれか、あるいは近代のそれを長く研究対象としてきたのに対して、その中間にある近世和歌を和歌史の上に位置づけようとする試みが意欲的に展開されつつあるのがこの十数年の学界の趨勢である。この論文は、文献学的方法に主としてよりながら、伝存に恵まれながら未整理・未解説の資料の少なくない近世後半の和歌の様相を仔細に見極めようとしたものであり、斯界の研究に対して新たな視角を提供するところが少なくない。

この論文は、大きく五つの部分によって構成される。主として小沢芦庵の著作『夢のたゞち』(明和二[1765]年、四十三歳)・『難蔵山集』(安永四[1775]年～、五十三歳以後)・『布留の中道』(寛政十二[1800]年刊、七十八歳)等を通して、「たゞこと歌」の主張が形成される過程、およびその家集『六帖詠草』の編纂の過程について考察する第一部(歌人小沢玄仲 出自と成長)、芦庵の家集『六帖詠草』編纂の過程と意義を考察する第二部(芦庵自撰献上本『六帖詠草』疑問)、『布留の中道』(先掲)の伝本研究を通して「たゞこと歌」の主張の時期やその内容について考察する第三部(歌論三部作 版本『布留の中道』に至る三部作(写本)の変化)、芦庵の和歌・歌論の継承について考察する第四部(小沢芦庵と香川景樹・芦庵周囲)、芦庵の和歌・歌論を継承した香川景樹ら桂園派が明治宮廷和歌の中心を占めながら、やがて凋落するにいたる過程を考察する第五部(桂園派の発展と凋落)である。

芦庵の主張する「たゞこと歌」という概念・用語の来歴の究明、また歌集『六帖詠草』の命名の由来とされる『古今和歌六帖』との関連のさらなる吟味など、いくぶんの課題が残されていること、論者も言及するところだが、解くところおおむね肯綮に当たり、文献学的方法を駆使しつつ、従来いくぶん閑却されきった憾のある、近世から近代への和歌史の推移について秀抜の提案を試みた野心作となっている。

以上の所見により、本論文は、大阪市立大学博士(文学)の学位を授与するに値するものと認められる。